

三育だより

2026年7月24日発行

2026年度第1号

学校法人三育学院 東京三育小学校

〒177-0053 練馬区関町南2-8-4

TEL 03-3920-2450

URL <https://www.tokyosaniku.ed.jp>



校訓「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。」(口語訳聖書)

「割り切れないもの 心のBlue Note」

学校長 平田 理(ひらた まこと)

「遠き山に陽は落ちて、星は空を散りばめぬ」(『家路』作詞:堀内敬三)。夏の夕焼け空を見上げるとき、ふとこの美しい歌詞が思い浮かぶことがあります。これは、チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザークが米国のナショナル音楽院院長に就任していた時代(1892-1894)に、「アメリカらしい音楽」として生み出した「交響曲第9番『新世界より』第2楽章」の一節(1893)です。ドヴォルザークはこの音楽院で、アフリカ系アメリカ人の学生ハリー・バーリーと出会い、彼が口ずさむ「黒人霊歌」を数多く聴いたことが、のちの名曲たちに色濃く反映されたと言われています。



さらに時代が進むと、『ラブソディ・イン・ブルー』(1924)で知られるジョージ・ガーシュインらがこの流れをジャズと融合させ、人間の生々しい感情(ブルース)や魂に訴えかける音楽(ソウル)として、広く大衆へと広がっていきました。黒人霊歌は、人間としての尊厳を極限まで奪われた過酷な奴隷制の中で生まれましたが、絶望を歌う「悲しい音楽」だけではありません。彼らの心が完全に擦り切れてしまわなかったのは、音楽という表現手段があったからだけではなく、その根底に「神様への絶対的な信仰」と「いつか解放されるという希望」があったからです。彼らにとって音楽は、日々の苦しみや痛みを神様に訴え、仲間と分かち合うための手段でした。更に、「どんなに虐げられようとも、神様の目から見れば人は等しく尊い存在であり、必ず約束の地へ導かれる」という、魂の安全基地を抱いていることの告白でした。ですから、音楽と信仰は切り離せないものであり、まさに「溢れ出た信仰の表現」が彼らの音楽だったと言えるでしょう。

クラシック音楽の整えられた音階とは異なり、『ラブソディ・イン・ブルー』の冒頭で下から上へと滑り上がっていく木管楽器の音色は、私たちの生々しい心の内面をそのまま表現しているかのようです。人間には、「寂しいけれど、どこか温かい」「悲しいけれど、言葉には表せない」というような、割り切れない感情や白黒つけられない微細な感覚が備えられています。ドヴォルザークやガーシュインらが試みたのは、平均律にはない「割り切れない音」や「長調でも短調でもない響き:ブルーノート」を用いて、言葉にならない魂の叫びを表現することだったのかもしれませんが、使徒パウロはこのように記しています。

「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。」(ローマの信徒への手紙8章26節)
私たちの言葉にならない心のうめきに寄り添い、執り成してくださる天来の助けがあることを教えてください。

『家路』で演奏されるイングリッシュホルンの、少し鼻にかかったような素朴な音色は、幼い日の夕刻に感じた「おうちに帰ろう」という温かい記憶を呼び起こします。「今日の業を為し終えて、心かろくやすらえば」。大人も子どもも一日の終わりに、言葉に表せない哀愁と懐かしさに包まれながら、本当の故郷、魂の安息へと還りたいものです。



Tokyo San-iku Elementary School

Since 1898

東京三育小学校

校内行事報告

入学式 4月



全校児童が一堂に会して行われた第78回入学式は1年生を6年生がエスコートして始められました。神さまのお導きのうちに集められた1年生です。神様が一人ひとりの個性を輝かせ、伸ばし、6年間を豊かに祝福していただきますように、心を合わせて会衆一同お祈りしました。その1年生は1学期間、毎朝元気よく讃美歌を歌い、聖書をよく学び、よく祈り、よく遊び、神さまが大好きになりました。

運動会 5月

「仲間と助け合い、バトンをつなぐ運動会」をテーマに、練習を重ね、成果を喜びあった運動会でした。1・2年生のボルカはみんなが一体となったダンスとなり、さらに全校児童と家族・卒業生とのボルカも行われ、三育ファミリーを体感しました。3・4年生の8の字跳び、5・6年生の大むかで競争、5・6年生の鼓笛隊、親子競技、徒競走、リレー、綱引き、障害物競走、そして保護者競技と本校ならではの種目を今年度もすべて行うことができ、神様に感謝しました。仲間と助け合い、バトンをつないだ運動会の後は、学年を越えて活動する幅がより広がり、深まり、それぞれが心を通わすバトンもつないでいます。



国際交流プログラム 4月

今年はニュージーランドのセブンスデー・アドベンチスト教会・ELEVTEEDの青年達が来校しました。マオリ語Kia ora (キオラ・こんにちは)でお互いに挨拶し、全学年での全体プログラムや学年に分かれて文化交流し、昼食を共にし、一緒に遊びました。子どもたちは英語で一生懸命会話し、それに丁寧に答えてくださいました。「わたしたちの体は鍛錬していくと頑丈で筋肉質な体になります。脳も筋肉のように、鍛えれば鍛えるほど活性化し、機能が向上します。皆さんの頭脳を必要としている人々が世界にはたくさんにいます。だからあなたの頭脳を鍛えて、人々のために使ってください。」“I can try. I can learn. I can do amazing things in Jesus.”お祈りと共に、学校での学びは神様の働きのためにみんなが用いられるためだと教えてくださいました。



祈禱週 6月

三育関町教会・小金井教会牧師の平賀和弘先生による祈禱週でした。「イエスさまが教えてくださいました祈り」と題して、毎朝お捧げする「主の祈り」について分かりやすくお話ししていただきました。感想文には「ぼくたちは神様のたからものだとわかった」「いつも助けてくださる神様に感謝」「謝る心とゆるす心をあたえてくださいとお祈りしたい」「いつもお祈りしている主の祈りについて詳しく知ることができて感謝します」とありました。「主の祈り」が定型文の祈りでなく、意味を考えて、かみしめてお祈りできるようになりました。

沖縄修学旅行 6月

沖縄の地で沖縄地上戦があった戦跡を見ること、聞くことによって、戦後、戦争は行なわれていない日本の「平和」の意義、また「わたしたちにはなにができるのか」を考えさせられました。また沖縄三育小学校での系列校6校合同交流会が持たれ、賛美をとおして皆が一つになり、離れていても全国に仲間がいることに感謝し、祈り合いました。3泊4日の修学旅行は、朝夕に礼拝を行い、クラスメイトの神様の証しを聞き、神様に与えられた仲間と共に過ごせることに感謝し、最終学年の絆をより一層深めました。



皆さまのお祈りのうちに、1学期を無事に終えることができました。日頃のご支援と併せまして感謝いたします。7/22～8/31は夏期休暇です。厳夏の折、お気をつけてお過ごしください。お祈りしています。